

朝日庄内の風

令和6年8月8日 第30号
朝日庄内森林生態系保全センター



4月1日より新体制スタート！

- ・西荒瀬保育園 森林体験活動
- ・今年度の巡視活動が始まりました
- ・あさひ小学校 自然教室
- ・朝日山地のチョウ類群集調査、実行中

6月下旬に朝日山地で見つけた準絶滅危惧種のヒメシジミ♂

4月1日より新体制スタート！ 職員よりご挨拶



あさひ小学校で出前授業

とがわ なおひさ
所長 十川 尚久

4月の異動により当センターに参りました。鶴岡市朝日地区に勤務するのは、平成4年に朝日合同森林事務所で鱒淵、田麦俣森林官としての勤務以来32年振りになります。当時は朝日山地森林生態系保護地域も設定されていませんでしたから、当センターもありませんでした。朝日山地森林生態系保護地域は平成15年3月に設定され、当センターは翌年3月に開設されております。

朝日山地森林生態系保護地域は、山形県と新潟県にまたがる朝日山地の中核部に位置し、原生的な天然林を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存などを目的として設定されており、後世に引き継いでいくこととしております。当センターでは貴重な森林生態系の適切な保全管理、野生鳥獣被害対策などを行っております。地域の自治体や各団体等のご協力により巡視活動や森林環境教育などを進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。



保育園児にハチ類の説明

ありもと みのる
生態系管理指導官 有本 実

今年4月に着任しました有本と申します。前任地は東北森林管理局計画課で保護林やイヌワシ・クマゲラ等を担当し、その前は藤里森林生態系保全センターと津軽白神森林生態系保全センターで3年ずつ、主に哺乳類調査に携わっていました。野生動植物全般の観察と撮影をライフワークにしていますが、特に好きな分野は魚・昆虫・茸類です。

朝日山地は20代後半の夏、タキタロウを釣るために大鳥池で1週間テント生活を送ったり、やはり1週間かけて全山縦走したりした、私の中では特別な思い出のある山域です。4月以降、すでに私的に入り浸りつつありますので、山中で見かけましたらお声がけください。どうぞよろしくお願いいたします。



望遠鏡でサギ類を観察

くどう しゅうや
主事 工藤 柊也

当センター勤務2年目となりました、工藤と申します。今年度も総務・経理担当として責任感を持って業務に取り組むたいと思います。正直なところ動植物に関して知識がありませんので、朝日山地という大きなフィールドでたくさんの方の事を学び、朝日山地の良さを伝えていけるように着実に前進してまいります。

また、入山される方一人一人が私たちを見守ってくれている美しい朝日山地のためにマナーを守っていただきつつ、自然を満喫していただければと思います。

すがわら なおみ

非常勤職員 菅原 直美

これから暑い夏がきます。体調管理に気をつけて仕事に取り組んでいきたいと思います。

今年度もよろしくお願ひします。



朝日山地の初夏を彩る
ウゴツクバネウツギ



・会議の議事録作成中・

西荒瀬保育園 森林体験活動

きのこの駒打ち体験

当センターでは『みどりの保育園推進事業』の一環として、西荒瀬保育園（酒田市）の年長組の園児たちと年3回の森林体験活動を行っています。

第一回目は、『きのこの駒打ち体験』を4月18日（木）に開催しました。まずは駒打ちの穴あけ体験をセンター職員と一緒に園児の代表者が行いました。ドリルの迫力に園児たちからは「すごい音！」「一瞬で穴開いた！」など大盛り上がりを見せてくれました。



ドリルの音と飛び散る木屑に大歓声！



手を打たないように優しく見守ります

駒打ちは16人の園児みんなで行い、シイタケのほだ木16本となめこのほだ木5本に駒を打ちました。初めて木槌を使う園児がほとんどで、力が足りずなかなか駒が入らず苦戦していましたが、すぐにコツを掴み元気いっぱい駒打ちをしていました。

最後にみんなで協力してほだ木を運び、きのこがたくさん出てくる“おまじない”をかけて終了しました。園児の皆さんと共に大きく成長してくれることを願うばかりです。

クロマツ探検隊

第二回目は『クロマツ探検隊』と題して、西荒瀬保育園に隣接するクロマツ林（国有林）で5月9日（木）に開催しました。開始する1時間前まで雨が降っていたため足元は濡れていましたが、天候は徐々に回復してくれました。

出発前には園児たちが「エイエイ、オー！」と元気な声を上げて出発しました。森の中の綺麗な植物だけではなく、ウルシやハチなど危険な植物や生き物がいることをお話ししながら探検しました。中盤にはクロマツの高木に作られたサギ類の営巣コロニーを観察しました。双眼鏡や望遠鏡

からサギ類の姿が見えたときには「見えた!」「飛んでる!」と大歓声が上がりました。そして探検の終わりには、クロマツ林に咲く花を使用して万華鏡作りを行いました。筒の中には個性あふれる世界が広がっていました。(工藤)



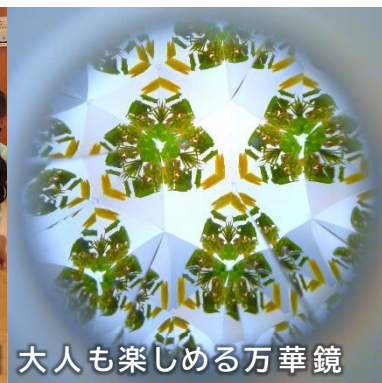
視線の先のクロマツにはアオサギとダイサギが!



このクロマツは何歳でしょう?



花卉をちぎって筒に入ると・・・! 大人も楽しめる万華鏡



今年度の巡視活動が始まりました

朝日山地森林生態系保護地域の看板設置作業

異常なまでの暖冬・小雪だった今年は樹々の芽吹きも早く、季節の移ろいに急かされるように、まずは朝日山地森林生態系保護地域(以下、保護地域)の登山口周辺で、保護地域の区域を示す看板の設置作業に取りかかりました。



① 小看板



② 大看板



③ 組立式看板

保護地域の看板には、①木にくくり付けている『小看板』(24箇所)、②駐車場脇等に通年設置している『大看板』(3箇所)、③春～秋のみ設置して冬期間は撤去する『組立式看板』(4箇所)の3種類があります。見たことある、という登山者もいらっしゃるのではないのでしょうか?

今回は6月11日(火)と12日(水)の2日間かけて、4箇所に組立式看板を設置してきました。ついでに環境教育等で使えるような被写体を見つけては小まめに撮影して、データをストックしていきます。

これから登山道を巡視しながら、看板が痛んだり亡失したりしていたら随時更新していきます。保護地域内では、生態系に悪影響を及ぼすような行為を行わないようお願いいたします。



各種会議の開催

巡視活動と同時並行で資料作成等の準備を進めていたのが、毎年開催している『朝日山地森林生態系保護地域巡視員会議（以下、巡視員会議）』と『朝日山地森林生態系保護地域部会（以下、部会）』です。巡視員会議は東北森林管理局が委嘱したボランティア巡視員の皆様と巡視活動等について情報共有・意見交換等を行う場、部会は学識経験者等の委員より保護地域の保全管理等について審議していただく場になります。

今年度は6月21日（金）に巡視員会議を、7月10日（水）に部会を鶴岡市朝日中央コミュニティセンターで開催しました。どちらの会議でも活発な議論が交わされましたが、近年山形県内で生息密度が高まりつつあるニホンジカやイノシシ等が話題の中心になりました。巡視員や部会委員の皆様からいただいたご意見やご助言を、保護地域の保全対策に活かしていけるよう検討を深めてまいります。（有本）



あさひ小学校 自然教室

朝日自然塾『みんなで歩こう六十里越街道』

鶴岡市立あさひ小学校の5年生自然教室として、六十里越街道登山と森林学習が7月4日（木）、5日（金）の2日間で行われました。当センターでは『朝日自然塾』の一環として、出羽三



山の自然を守る会と山形県山岳連盟鶴岡山岳会にご協力いただき実施しております。

初日の登山は、前日までの雨も上がり曇り空ではありましたが、七ッ滝駐車場から湯殿山神社までの約8kmを6時間かけて登山しました。出発地点では参加した皆さんと準備体操をした後に、児童たちの「お立ちいー……」「うけたもう！！」の大きな掛け声により出発しました。

六十里越街道は庄内地方と内陸を結ぶ古代から開かれた山岳道と伝えられており、室町

～江戸時代には出羽三山を巡って歩いた行者や物資を運ぶための庶民の生活にも欠かせない道でした。

街道沿いで見つけた植物。ギンリョウソウは児童たちに大人気で、覚えてくれたはず。



オウレンの種子



ギンリョウソウ



独鈷茶屋跡の“ねじれ杉”

山道を登ると周りは美しいブナの森となり、途中には数多くの史跡があり、児童たちはサポートしたスタッフからの史跡についての説明や周りの植物や生き物に出会いながらの登山となりました。

独鈷茶屋跡では独鈷の由来について聞いたり、冷たい独鈷清水を飲んだりと自然を体感しておりました。

元気だった児童たちも後半には疲れも見せていましたが、湯殿山神社に着いてからの記念撮影では、先生からの合図に元気でVサインで答えていました。



大鳥居の前で記念撮影 お疲れ様でした！

森林保全活動

翌日は鶴岡市大鳥地区において、朝日山地森林生態系保護地域内のスギ林に広葉樹を育てるための作業を行いました。事前学習として、6月20日(木)に森林の分布や働き、森林の整備について学習し、本番当日は実際に鋸で木を切る作業を体験しました。

作業前に児童たちは、当センターと庄内森林管理署の職員から森林整備の必要性や手順の説明を受け作業を始めました。最初は慣れない鋸に苦戦しながらも、交代しながら木を倒すことが出来ました。倒した木にも感謝しながら木を大切に使うために、輪切りにも挑戦しました。輪切りにした木は紙やすりで磨き、コースターなどで使うために持ち帰りました。



事前学習はクイズ形式で盛り上がりました

2日間の自然教室でしたが、生徒たちは普段から森林に囲まれて暮らしておりますが、長時間の登山の経験や自然観察による知識などに触れ、また、森林の働きや森林を整備する作業の大変さを体験し、木を木材として利用することの大切さを知るよい機会になったと思います。(十川)



伐倒したスギを輪切りにして活用します



毎年このスギ林を整備していて、
広葉樹の低木が少しずつ育ってきました

朝日山地のチョウ類群集調査、実行中

令和4年度の部会において、委員の方から「増加しつつあるニホンジカ(以下、シカ)の影響を評価する指標として、チョウ類のトランセクト調査を行ってはどうか」というご提案がありました。“シカの影響を把握するのになぜチョウの調査を？”“トランセクト調査とは？”と疑問に思われる方がいらっしゃるかもしれませんので、簡単にご説明します。

シカの影響を把握するのであれば、まず行うべきはシカそのものを調査することで、センサーカメラを設置したり食痕や糞、鳴き声等を調査したりするわけですが、これは東北地方においても白神山地や早池峰山などで実施されています。上記のご提案は、チョウ類群集のデータを用いて間接的にシカの影響を把握する、という方法ですが、果たしてそんなことは可能なのでしょうか？

現在日本には250種程のチョウ類が生息していますが、昆虫の中でも特に愛好家が多いため、ほぼ全ての種の生態が解明されています。このチョウはどんな環境が好きで、幼虫は何を食べて、年に何回発生して…といった生態情報が網羅されているため、とある地域にどんな種類のチョウがどれぐらいの個体数いるのかを調べることは、取りも直さずその地域の自然環境を調べることに繋がります。大部分の種は幼虫が植物を食べるため、シカの食害を把握するための環境指標生物としてチョウ類はうってつけなのです。高山帯にのみ生息する種や攪乱地の植生に依存した種などもあり、シカの影響評価はもとより温暖化や里山荒廃、開発行為などの指標として大変優れています。私自身も学生時代、『山岳域のオーバーユースの指標としてチョウ類群集を用いてはどうか』といったことを研究テーマにしていました。

このチョウ類群集の定量調査に用いられているのが、トランセクト調査、もしくはルートセンサスと呼ばれるもので、ヨーロッパのチョウ類モニタリングプロジェクト『eBMS』や環境省の事業『モニタリングサイト1000』などで使われている確立された手法です。具体的には、チョウ類が飛翔する春～秋の毎月2回、あらかじめ設定した調査ルートを晴天微風時に歩きながら、自分の左右・前方・上方約5mの範囲に出現したチョウ類の種名と個体数を記録していきます。詳



調査の様子。目視で同定できない場合は
捕獲して確認した後、放逐します。

細な調査マニュアルが『モニタリングサイト1000』のホームページ上に公表されていますので、興味のある方はそちらをご覧ください。

この調査はチョウの種名さえ覚えれば単純明快ですが、毎月2回、晴天微風時という条件が意外と難関です。環境指標性に優れたチョウ類の唯一にして最大の欠点ですが、成虫の飛翔活動が天候の状態に大きく左右されてしまうのです。雨の日は飛ばないので当然調査はできませんが、晴天でも強風時は調査不可、春や秋の曇天の低温時でも調査不可、逆に暑すぎる猛暑日も不可。天候の変化の激しい朝日山地の山岳地帯ではより一層困難なため、色々検討はしてみたものの、残念ながら当センターの事業としては行わないことにしました。

ただ、シカの食害を全く受けていない状態のチョウ類群集の定量データを単年度でも取得しておくことは、比較可能なデータの蓄積という観点から非常に有意義なため、今年1年間に限り、当センターからほど近い保護地域内の東大鳥川沿いで試行的に調査を実行しているところです。これまでに計6回、天候を気にしつつ業務の合間を縫って調査していますが、なかなか興味深いデータが得られています。今年度末にはデータを取りまとめて、本誌面上においても調査結果の概要を掲載する予定ですので、どうぞお楽しみに。(有本)

ミニコラム 環境指標性の高いチョウ達

朝日山地周辺に生息するチョウ類の中でも、とりわけ環境指標性の高いチョウを4種類ご紹介します。まずは①ギフチョウですが、春先に年1回のみ発生してカタクリ等のスプリング・エフェメラルで吸蜜するため、手入れされた健全な里山林の指標になります。②オオゴマシジミの幼虫はカメバヒキオコシやクロバナヒキオコシを食べて、4齢以降は森林性のモリクシケアリの卵や幼虫を食べる半肉食性です。食草は溪谷沿いなどの林縁に生育し、モリクシケアリは倒木や朽

木に営巣するため、このチョウは原始的な森林生態系のシンボルです。③ベニヒカゲは高山蝶で低標高地では生息できないため、温暖化が進行すると逃げ場がなくなり絶滅してしまいます。④ウラギンシジミは元々東北地方にはいませんでしたが、近年の温暖化に伴い徐々に分布を北上させている種で、山形県内でも増加傾向です。③・④の増減は地球温暖化のバロメーターとして有用です。

(文・撮影：有本 実)



発行：林野庁 東北森林管理局 朝日庄内森林生態系保全センター

〒997-0404 山形県鶴岡市下名川字落合3 TEL: 0235-58-1730

<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/syo/asahi/>

